

2019年度活動報告 交換授業：イン・アングラZD（会話・作文）

中野 陽（関西学院大学日本語教育センター）

小原 俊彦（関西学院大学日本語教育センター）

1. クラス概要

本授業では、基礎段階における言語活動従事を促進させることを目的に、自己表現活動を行った。同時に、発音の向上を目的に、シャドーイングを行った。授業の中心としたのは自己表現活動である。自己表現活動は、対話を通じて人格を伴った他者の発話を模倣的に盗み取り、それを自身の発話として専有することを習得の原理としたものである。それにより、さまざまなテーマで自身について語り、また他者を理解することを通じて新たな自己を形成し、同時に文型・文法も、それを焦点化せずに習得することを目指した。本コースは2つのクラスの同時並行で行った。学生数は、それぞれ12名、11名であった。

2. 授業内容

授業は週2コマで、各コマ、前半でシャドーイングを、後半で自己表現活動を行った。

シャドーイングは、『みんなの日本語初級Ⅱ（以下、みんなの日本語）』（スリーエーネットワーク）の第26課から44課までの練習Cを素材として用いた。

自己表現活動は、次のような形で行った。まず、『みんなの日本語』の44課までの文型・文法を段階的に織り込んだ架空の人物3名のナラティブ（オリジナルで作成）を、12のテーマで用意した。ナラティブは3名の人物が語り手となり、学習者に自分の話をするという体裁を取っている。授業では、2コマで1つのテーマを取り上げた。1コマ目は、ナラティブの内容を言語的に経験しながら能動的に理解し、口頭で練習した後、その言葉遣いを援用して自身についての質問に答える活動を行った。そして、宿題として、ナラティブをモデルに同じテーマでエッセイを作成する宿題を課した。2コマ目では、教師によって添削・清書されたエッセイをペアで読み聞かせ合い、それについて語り合うエッセイシェアリングを行った。

3. 成果と今後の課題

自己表現活動のハイライトとも言えるエッセイシェアリングでは、毎回学生の生き生きとした様子が見られた。また、表現力の高まりも、学生の自発的な発話から見て取れた。こうした自己表現活動は学習者の日本語習得を促進するのに有効であると考えられるため、今後も発展させながら実施していきたい。